

孫基禎

1912年(大正元年)－2002年(平成14年)

「日の丸抹消事件」後、明治大学を卒業し、日本の敗戦による解放後は48年大韓体育会副会長に就任、63年には韓国陸上連盟会長、66年から79年まで韓国オリンピック委員会(KOC)常任委員、79年から88年にはソウルオリンピック組織委員を歴任した。82年マラソン強化委員長、83年社会体育センター顧問、85年韓国オリンピック委員会常任顧問に就任。88年ソウル五輪で聖火ランナーをつとめた。91年にはソウル市に孫基禎公園がオープンした。



1936年 ベルリン五輪マラソン予選会

1935年 11月 第8回神宮大会に出場（五輪2次予選）

結果▶孫基禎1位 2h26m42s（公認の世界記録） 南昇龍4位



陸連「1923年のロス五輪は、金恩培、権泰夏という朝鮮人が参加し惨敗した。これは、朝鮮人2人を入れてチームが乱れたからだ。今回は、鈴木房吉、塩飽玉男（しわくたまお）の2人を代表にして、孫基禎、南昇龍(ナム・スヨン)のうち1人を代表にする。」

1936年 5月 最終選考レース 陸連「南昇龍は一位にならないとベルリンに連れて行かない」不当な取り決め

結果▶南昇龍1位 孫基禎2位 鈴木3位 塩飽4位

代表に4名が選手 南昇龍、孫基禎、塩飽玉男、鈴木房吉の4名。

陸連「4人をベルリンに連れて行って、現地で最終選考をする」その結果で、出場3名、補欠1名を決めるという理不尽な決定。

ベルリンでの朝鮮人に対する差別

- ・ マラソンの出場を日本人選手2人にしたいコーチ
- ・ ベルリンで迎えに来たドイツ日本大使館員
「どうしてマラソン代表に朝鮮人が2人も入っているのだ」

孫基禎の抵抗

- ・ 「日の丸」の着いたトレーニングシャツを着なかった ⇒
- ・ 外国人にサインするときにも、朝鮮半島の地図を入れ、ハングル文字でサインする。
- ・ 街で会う人に「コリアの孫基禎です。」と自己紹介

開会式での行進で

馬術選手 「帝国陸軍軍人が朝鮮人や女の後ろを行進できるか！」それを聞いた、旗手で陸上競技選手団主将の大島謙吉が「ここはオリンピックの場である。陸軍軍人も朝鮮人もあるか！選手団として決められたことを守ってきちっと並べ！」

※これ以降、大島謙吉とは親交をを深める



ベルリンでの代表選手選考 1936年7月22日

…前回の1932年ロス五輪でも日本代表3人のうち2人が朝鮮人ランナーだった。メンツを失った日本は、今度こそ代表枠3人のうち2人を日本人から選びたいと考えていた。しかし、国内予選の上位を占めたのはまたも2人の朝鮮人だった。日本オリンピック委員会はとりあえず日本人2人を含む4人を代表に選んだ。そして大会直前の7月22日、現地で30kmの最終選考レースを開いた。

マラソンは8月9日だった。日本からは、日本は孫基禎、南昇竜（ナム・スンヨン）、塩飽（しわく）玉男、鈴木房重の4人を送り出したが、予選会の記録がいずれの選手も芳しくなかった。そこで現地で選考会を行うこととなった。

「めちゃくちゃですよ。本番18日前ですよ。それほどまでにして日本人を選びたかったんです」孫基禎談（朝日クロニクル週刊20世紀011－スポーツの100年－より）

ところが鈴木は体調をくずしてしまい選考会を途中棄権。塩飽はコースを逸脱して抜け道を走る。レース後、南昇竜は卑怯なことをした塩飽を殴る。

⇒最後まで朝鮮人2人をレースに出さない目論見はくずれ、孫、南の朝鮮人2人と、日本人の塩飽を代表とした。

ベルリンオリンピック 男子マラソンの展開 1936年8月9日午後3時

- ・ マラソンの本命はロサンゼルス五輪の金メダリスト、ザバラ（アルゼンチン）
- ・ 15時スタート。56名の選手。気温30度
- ・ 15時4分ザバラが先頭で競技場を出る。
孫基禎22位、塩飽玉男44位、南昇竜49位だった。
- ・ 6キロ ザバラ、ディアス(ポルトガル)、ハーパー(英)
ブラウン(米)、孫と続く
- ・ 10キロ サバラ先頭。孫は自重。
- ・ 12キロ 先頭ザバラのペースアップ
4位の孫もペースを上げようとするが、
ハーパーに「スロー、スロー」と声を
かけられ、ハーパーと並走。
- ・ 折り返し すれ違ったザバラが朦朧としているのに
気づく。南昇龍はこの時点で8位
- ・ 30キロ ザバラが転倒して意識不明になる。



ベルリンオリンピック 男子マラソンの展開 1936年8月9日

- ・ 30キロ ザバラを抜く。ハーパーと孫が先頭に立つ。
- ・ 31キロ ハーパーを離してトップに立つ。
- ・ 37キロ ビスマルクの峠で体力を消耗。ネーブ夫人から水をもらう。
- ・ 42キロ **孫基禎 先頭でゴール**
(2時間29分19秒のオリンピック新記録)
2分遅れでハーパーがゴール。
19秒差で南昇龍が3位でゴール。
塩飽は30km付近で途中棄権

マラソン優勝は1912年金栗四三が挑んだストックホルム五輪以来、日本陸上界の悲願であり、帝国日本、朝鮮民族にとっても栄光の瞬間だった。

孫基禎とハーパー



表彰式の様子

孫、南には「日の丸」が上がることも、「君が代」が流されることも知らされていなかった。

表彰台に立つ孫基禎（中央）と南昇龍（左）アーネスト・ハーパー（右）、

孫基禎は月桂樹で胸の「日の丸」を隠し、南とともにうつむいている。



孫基禎選手は語る－表彰台での「思い」－

表彰式で…

「…表彰台にあがると頭に月桂冠、さらにかしわの若木(*)を両手でいただきました。怒涛のように大観衆の拍手がわきおこりました。ところが、わたしが優勝の歓喜に酔いしれたまさにそのときでした。空に日章旗があがり、君が代が鳴り響いたのです。驚天動地の心境でした。私はそれまで、優勝すると日章旗が掲揚されるとは夢にも思っていなかったのです…。 [] の悔しさとみじめさ、悲しさと怒りが胸底に深く沈下し、涙がとめどなく頬を伝わりました」「日本の人びとには、あれは優勝の栄冠に輝いた [] の涙だといいました。しかし、そうではなかったのです。心の中では、憤怒の叫びをあげていたのです。『俺は [] じゃない。 [] なんだ』と。」

「実際私は、それまで一度だって日本のために走ったことはなかったのです。正真正銘、自分自身と植民地下で呻吟する同胞と祖国のために、貧しさやひもじさに堪えて走っていたのです。私はこのとき、日の丸のために、二度と走るものかと決意しました。私は、私のマラソン人生を24歳で一度は捨てたのです」

* 「かしわの若木」－ドイツに昔から伝わる謂われで、もっと伸びよという励ましがこめられている。現在、孫基禎の出身校養正（ヤンジョン）高校跡地（現在の孫基邸記念公園）に20m余の大樹となってそびえている。⁸

孫基禎への賞賛の声

○日本での賞賛

「"マラソン日本"世界を征服」 『読売新聞』 1936.8.10
「今ぞ成就する24年の宿願 孫に輝く“大会最大の覇者”南も憤走して3等に入賞」
⇒紙面では「**内鮮融和**」の一助に、**帝国日本の英雄**になることが語られる。

○朝鮮での歓喜

「朝鮮男児の意気 孫基禎の壮拳」 「スポーツ朝鮮最大の感激!!」
⇒孫と南が**民族の英雄**として**朝鮮民族を代表**してくれていることを強調
⇒民族運動への警戒

表彰式後、選手村での選手団祝賀パーティーがあったが、孫と南は出席せず。
その時、権泰夏(クォン・テハ)に2人は連れ出されて、安鳳根(アン・ボングン.安重根の従兄弟)
に会い「太極旗」と初めて対面する。
⇒その後で、パーティーにいなかった事が日本選手団に知れて怒りを買う。

日本選手団との軋轢、**警戒される存在**となる。

日の丸抹消事件 事件の顛末

1936年8月25日 朝刊

日章旗を胸につけ、孫基禎、南昇龍、ハーパーの3人が映った写真が掲載される（朝刊）

「孫基禎、南昇龍両選手は、わが半島の誇りである。朝鮮半島にはこのような優秀な青年が大勢いる。これは日本のため、本当に喜ばしいことである」

（談話 南次郎 朝鮮総督）

8月25日 夕刊 『東亞日報』で日の丸を抹消した表彰台の勇姿が掲載
李吉用（イ・キリョン）記者が李象範（イ・サンボム）専属画伯に孫の胸にある日章旗をボカして見えないように修正するように依頼している。第2版（夕刊）からは、日章旗の消えた孫の写真が新聞に掲載される。



李吉用は8月23日付の『大阪朝日新聞』の孫の写真(右)を切り抜き、李象範に渡した。

日の丸抹消事件 事件の顛末

8月26日 李記者、李画伯、玄鎮健社会部長、申樂均写真部長、林柄哲編集記者ら5人を拘束、40日間の拘束、拷問 一日章旗抹消事件が計画的、組織的であったとして、その「自白」を強要した。

8月27日 朝鮮総督府指令第3号により、『東亜日報』は9ヵ月に渡る**停刊**処分。首謀者5人に誓約書。

「これから将来は、一切言論機関には参与せず、万が一また他の事件で立件された場合には、今回の事件の責任を加味した厳罰に服する」

⇒ 言論界からの永久追放

10月4日 李吉用(イ・ギョリン)釈放。

1937年6月2日 東亜日報の復刊を許可

(宋鎮萬社長、李記者、李画伯ら10余人が追放)



ベルリンオリンピック 帰国の途につく

8月19日 ベルリン五輪閉会式

帰国の途中、立ち寄った都市での模範試合を行う。

孫基禎、南昇龍は日章旗抹消事件が起きていたことを知らない。

シンガポールで同胞からメモ書きを渡される。

「注意しろ。日本人が監視しているぞ。本国で事件が発生。君たちを監視するようにとの電文が日本選手団に入っている」

⇒大島謙吉は、自殺するのではないかと孫に駆け寄ったほどだった。

上海 「日章旗抹消事件」をより詳細にきく。

長崎 警察に呼び出されて、「誰に会ってどんな話をしたか」を詰問
東京に着くまでにも、常に特高警察の監視の目がつく。

孫基禎「事あれば調査、訊問で、これではまるで刑事犯罪人と同じ扱いで、生きた心地がしません。優勝を返上したい思いです。」



Handwritten Japanese text, possibly a date or address, written diagonally.

POSTKARTE
KOR.



朝鮮全南羅州大正

李 伯林

柏林全

Die Olympische Spiele Berlin 1936.
Japan (Japan) auf der Strecke mit Harper
und Marston.
Die Olympische Postkarte
Verlag, Berlin SW 68.

孫基禎がベルリンから友人に送った葉書には
私は悲しい」とだけ書かれていた。

朝鮮への凱旋のはずが

1936年10月8日

養生高校の黄澳(ファン・ハン)先生とソウルの汝矣島(ヨイド)空港に到着

凱旋帰国のはずが、入口は閉鎖され、群衆を寄せ付けなかった。周囲には私服警官が遠巻きに包囲していた。孫基禎は、右腕をサーベルを持った警官に、左腕を私服警官に捕まれ、**重罪人を連行するような様子**だった。

- ・ **祝賀会、歓迎行事の一切の禁止**。級友たちの茶話会までもが禁止。
- ・ 2ヵ月経って、朝鮮総督府学務局と朝鮮日報主題の、初めての歓迎会が開かれたが、参加者が体育教師に限定され、**報告会のようなもの**だった。

孫基禎の快拳が、朝鮮人に自信を持たせ、**独立運動に勢いをつけるのではないかと**いう恐れがあったのだろう。

汝矣島(よいど)空港での孫基禎

優勝は、鬱屈とした日を送っていた朝鮮人に大きな励ましを与えた。植民地支配下で、擦り込まれた劣等民族という意識を粉碎した。しかし、そのことが、孫基禎に対する弾圧・監視に繋がっていった。

日本の治安当局は、民族運動や反日運動に利用されるのを恐れた。

優勝し、凱旋で帰国したとき、腰にサーベルの警官と私服刑事に理不尽に拘束される孫基禎

(1936年10月8日、汝矣島(よいど)飛行場(ソウル))



孫基禎の利用

1941年 太平洋戦争に突入。
朝鮮総監府は**兵士確保のため学徒兵を募集**するが集まらない。
日本軍のために命を捧げる事への抵抗



強いプロパガンダと強制力が必要。
その役目を孫基禎に担わせた。オリンピック優勝の名声を利用。
朝鮮総督府と憲兵によって朝鮮中の旧制中学校に派遣され、学徒募集の演説を強要される。

「皇国のために生命を捧げることは、男子一生の栄光」である。

晩年の孫基禎の述懐

「この演説が私の人生で最も悔いの残ることであった。『天皇陛下のために死んでくれ』と、朝鮮の無垢な学生に向かって言うのである。心が痛まないはずがない。」

1940年6月第1回東亞競技大会、1940年東京オリンピック返上に替わる大会
⇒競技から離れているが、聖火団の一人として参加。**帝国日本の金メダリスト**
として大会の式典に孫基禎を利用した。

その後の孫基禎

1937年 当時の普成専門学校(高麗大学)に入学。新入生を歓迎する学生たちの集会は、朝鮮独立を陰謀する集会だとして、警察に蹴散らかされた。

1937年 このままソウルには、周囲に迷惑をかけると心配した孫は、日本に渡り、明治大学に入学したが、陸上競技には参加しない、人の集まりに顔を出さない、できる限り静かにしておくことを命令された。特別高等警察によってチェックされて、帰国後に「要注意人物」として監視を受けることにも繋がった。
箱根駅伝を走らぬメダリスト一視線の集まる場所からは避けて通る

1939年 朝鮮日報記者で陸上選手でもあった姜福信(カン・ボクシン)と結婚
姜福信は女学校の体育教員として働く。

1940年 卒業後、朝鮮陸連の紹介で京城の朝鮮貯蓄銀行本店に就職。

1944年 姜福信の死 享年29歳

その後の孫基禎

1937年 24歳	普成専門学校(高麗大学)に入学 明治大学法学部入学
1940年 27歳	明治大学卒業 朝鮮に戻り、朝鮮貯蓄銀行入行 元陸上選手、姜福信と結婚、1944年死別(29歳)
1945年 33歳	終戦 朝鮮体育会 参与
1947年 34歳	第51回ボストンマラソンに監督として参加 徐潤福優勝 南昇竜11位
1948年 35歳	ロンドン五輪開会式で 韓国の旗 を掲げる。
1948年 35歳	韓国体育会副会長就任
1950年 37歳	第52回ボストンマラソンに監督として参加 1,2,3位独占
1963年 50歳	韓国陸上競技連盟 会長就任
1966年 54歳	第5回 バンコクアジア大会 韓国選手団長
1988年 75歳	ソウルオリンピック 聖火最終走者
2002年 90歳	11月15日永眠

それからの孫基禎(戦後)

明治大学入学 (箱根も走らず…)

朝鮮で結婚。マラソンの普及や選手養成に尽力

妻の死、朝鮮戦争を超えて、陸上競技の指導者として、韓国オリンピック委員会の委員として、韓国での体育・スポーツの振興と発展に尽力。

1972年オリンピック・ミュンヘン大会に招待され、36年ぶりにドイツの地に立つ。

1984年、オリンピックロサンゼルス大会に招待され、開(閉)会式で「ソン・ギジョン」という韓国名で紹介され、全世界にテレビ放映される。

1988年、ソウルオリンピック。聖火リレー最終走者の一人として、競技場へ登場。両手をかざし、跳ねるようにトラックを駆けた。

2002年 死去

国籍回復事件

1970年8月15日 韓国の光復節

ベルリンを訪れた韓国の国会議員朴永祿(パク・ヨンロク)が、オリンピックスタジアムの石壁に刻まれた孫基禎の国籍「JAPAN」を鑿と金槌を使って削り、「KOREA」と刻み直す。

正式な手続きを取っていないため、朴永祿に逮捕状が出される。朴は逮捕されることなく帰国したが、西ドイツは「KOREA」を「JAPAN」に戻す。

孫基禎は

・・・復元「JAPAN」は国際オリンピック委員会が決めたことなのでやむを得ないと思う。しかしあのとき私は心の中では、日本のために走ったのではなく、韓国のために走った。日本の人は知らないかも知れないが、韓国では今でも「国無し時代の孫が優勝した」と言っている。私も同じ気持ちだよ。

(『朝日新聞』1972年8月26日)

1988年

ソウルオリンピック 開会式

最終聖火ランナーの一人としてスタジアムを走る孫基禎



ベルリン五輪「金」孫基禎

【ロンドン＝共同】国

際オリンピック委員会（IOC）は15日までに、公式ホームページのメダリスト紹介で、国籍を日本としている1936年ベルリン五輪の男子マラソン優勝者、故孫基朝鮮半島出身説明も

禎選手に関する説明文を、これまでの日本名表記から「ソン・キジョン」と韓国語の発音に基づくローマ字表記を用いた形に変更した。日本の植民地支配を受けていた朝鮮半島出身であることを強調する説明も追加した。韓国オリンピック委員

IOCのHP、表記変更

会（KOC）は以前から、孫選手の名前を日本名表記の「ソン・キテイ」から変更することを求めていた。IOCは「五輪の歴史の変更は避ける」として当時の公式表記は変えず、説明文で「ソン・キジョン」と明記した。また、当時の朝鮮の新聞がユニホームの胸の日の丸を消した孫選手の写真を掲載し、この新聞の関係者が投獄されたことなど、朝鮮社会が日本に抵抗した歴史も紹介している。

IOCは「当時の複雑な歴史を知り、より詳細な背景を付け加えた」と説明。韓国メディアは「半分だけ要求が通った」と伝えている。

名前表記

日本名「ソン・キテイ」から、韓国語の「ソン・キジョン」へ表記を変える。

『中日新聞』

2011.12.16夕刊

南昇龍(ナム・スニョン) 1912年-2001年

南昇龍は、養正高等普通学校では孫基禎の2学年先輩で好記録を残したが、学業不振で進級できず、在籍は1年のみであった。その後、東京目白商業学校に編入学の後、スカウトされる形で1935年に明治大学に進学した。明大在学中は箱根駅伝で活躍した。

1936年のベルリン五輪のマラソンに出場され3位入賞を果たし、銅メダルを獲得した。この2人の快挙は、植民地支配されていた韓国・朝鮮の人々の暗い鬱屈とした気持ちを晴らし、民族の誇りを自覚させた。

表彰台では2人のうつむく姿が印象的であるが、孫と同様、どのような思いで「君が代」を聴いたのか、想像を絶するものがある。

明治大学を卒業し、第二次世界大戦後は祖国である韓国に戻り、選手生活を続けた。1947年のボストンマラソンに出場し、34歳ながら12位となっている。

この南昇龍、孫基禎の偉大な業績を称えて、明治大学リバティ・タワー23階には、ベルリン五輪当時のニュース、写真などが展示されている。この展示を注意深く見ると、レース直前まで、孫も南も日の丸のついたユニフォームを着ていないことがわかる。孫は白の無地のトレーナー、南は胸にMのついた明治大学のシャツを着ている。日帝支配に対する小さな抵抗だったのかもしれない。



3位入賞した南昇龍の表彰台でうつむく様子²³

孫基禎—「日章旗抹消事件」からの視点

スポーツを「政治的に利用」することは許されないが、スポーツと政治を切り離すこと自体に無理があるのではないか。スポーツは政治や世俗と切り離された純粹無垢のものではなく、むしろ、その関係のあり方こそ問われるべきではないか。それは、スポーツというものが持つ構造上の問題でもあり、スポーツが「プレイ」だけで成り立っているものではないことの表われではないか。

①誰もが安心して、自らの意思でスポーツをすることかできるように平和で民主的な社会を築くことは「政治」の責務。

②また、スポーツを純粹に楽しむための条件づくりに「政治」は何ができるかが問われるべき。（平和で民主的な社会づくり、財政的保障、施設・設備の拡充などの条件整備等々）

③国民スポーツの振興も、競技スポーツの振興も、政治は国民のスポーツ要求にどう応えていくかが関われる。